

国分寺市・国立市中国残留邦人等地域生活支援事業
「中国残留邦人問題」から学ぶ

庶民の戦争史—外地・内地の人々の暮らし—

講師：佐々木 賢さん

戦後 70 年目となり、戦争体験者が少なくなっています。そんな中、集团的自衛権行使容認の閣議決定がなされ、特定秘密保護法が施行されました。今国会では既に衆院で「戦争法案」が強行採決されています。庶民にとって戦争とはどういうものか、庶民ができることは何なのか。「満洲」の「奉天(瀋陽)」で満鉄職員の子どもの生まれ、12 歳で敗戦、翌年に引揚、戦中戦後に少年時代を過ごした佐々木賢さんにお話を伺いました。(2015 年 1 月 18 日実施)

1. はじめに

私は今年 81 歳になります。いま、社会から戦争の記憶がだんだん薄れていって、しかも何かきな臭い感じがしています。この間もパリでテロがありました。「テロをやっつけろ」というデモもありました。「イスラム国」が国際社会に登場しました。「イスラム国」には警察もあり、軍隊があって軍事教練をしていますし、税金も住民から徴収していますから、完全な近代国家です。歴史をみると、どの国も誕生する時は概ね暴力的でした。

国家と国民、あるいは庶民。庶民が被った戦争の害と国家が被った戦争の害とでは、大きな違いがあると思います。今日は、最初に、戦争をするとき、国家と個人の関係、あるいは支配層と庶民は違うということをお話しします。

二番目に感情の方が世の中の動きを左右して理性は小さくなる、とくに戦争のときには理性がなくなるということ(理性<感情)、三番目に加害者と被害者は重なりあうということをお話しします。

国家は領土や民族や宗教の違いで喧嘩します。戦争したりします。「お前日本人だろう」と言われたりしますね。日本人なんだけれども、私は佐々木賢という個人である。(四角形を板書しつつ)これが国家だとしますと、個人が中にいます。その中にテロをやる者が若干います。確かに、イスラム国でも少数のテロリストがいますが、「イスラムはテロだ」と言

って全部を見てしまう。テロをやらない多数の人がいるのに。全体主義者は、一部の人を見て、国民や民族や宗教の信仰者の全体を代表させてしまいます。そういう考え方をやめよう、全体主義を止めようじゃないかということを、今日の話の全体で申し上げようと思っています。

2. 国家と個人の関係 — 支配層と庶民

■シベリア抑留

国家と個人ということで、いろいろな例がありますが、「抑留裁判」もその一つです。この裁判は 1981 年に始まり、その後に各地に広がりました。ようやく 2010 年 6 月に「戦後強制抑留者に係る問題に関する特別措置法(シベリア特措法)」ができました。

敗戦直後、関東軍の参謀とソ連軍の指揮官ワシレフスキーが文書を交わしています。その中に山口敏寿中佐が、「日本としては国体の護持は絶対に譲れません。ただし『満洲』にいる軍人や居留民はどうぞ賠償としてお使いください」という約束をしています。シベリアに抑留された人は 60 万人います。零下 40 度まで下がる厳寒での過酷な労働でしたし、飢死にした人も多数いました。戦時中は「売国奴(国を売る奴)」という言葉がありましたが、国家は国

民を売っていたのですから、「売国民奴」という言葉を使いたい。

ワシレフスキーはこの文書の中で、ドイツ軍がシベリアまでやってきて戦闘し、ソビエトの若い男女の兵士や民間人を含めて 3000 万人が死に、労働力不足になっているのだから捕虜を使って当たり前じゃないかという言い方をしています。スターリンも当たり前と言っている。ドイツの捕虜もたくさんシベリアにつれていかれたのです。日本政府もソ連政府もけしからん。国家の指導者たちは、国民のことを虫けらか、道具の一つにしか思っていなかったのだと思います。

■相互授賞

日本政府は 1964 年に、米国軍人のカーチス・ルメイに勲一等旭日大綬章を授けています。理由は日本の航空自衛隊を作るのに貢献したというのです。ですが、この人は東京大空襲を企画し、東京を壊滅させるために、大包围爆撃、円形爆撃を考えた人です。まず、焼夷弾を周りに大きな輪で落とす。火の手がばあっと上がると、人々は火の手と逆の方向に逃げます。だから円の中心部にワーツと逃げてきたところへ第二次爆撃をし、いっぺんに 11 万人が殺されたのです。11 万人も殺した爆撃は第二次世界大戦でも初めてなのです。この企画をした人に日本政府は旭日大綬章をしています。

一方、アメリカ政府は日米安保条約に貢献したということで源田実を表彰しています。この人は真珠湾攻撃を計画した人です。

アメリカ政府も日本政府も、国民をひどい目に遭わせた人たちを互いに別の名目をたてて表彰していることを皆さんご存じでしたか？

■国家犯罪

先日 (2015.01.06)、朝日新聞に「陸軍登戸研究所」の記事が載っていました。登戸で秘密兵器、毒ガスの研究していた。そこから、孫文の横顔のすかしがあり、絹の繊維がすき込まれている偽札の紙幣が出てきたのです。当時のお金で 40 億円、今で言うと 1000 倍ぐらいになります。日本政府が 40 億円の偽札を印刷して中国で使っていた。偽札で日本

人がバンバン買いまくると、中国に物資が行かなくなる。当時、中国人がたくさん凍死したといわれています。偽札を作るだけで間接的に人殺しをやっています。そういうことを国家がやっている。権力者というのは隠しますから、国家犯罪というのは 70 年ぐらい経ってからでないといけないのです。

■開拓団

長野県の阿智村で、山本慈昭というお寺の和尚さん(国民学校の教員も兼職)が「満洲」に行ってくれと頼まれ、どうしても断り切れず、敗戦直前の 1945 年 5 月に 2 歳と 6 歳の娘と妻を伴って「開拓団」としてソ満国境に送られた。その小学校の校長をしていたのですが、3 カ月でソビエトが参戦します。飛行機で機銃掃射をしますから、無垢の住民が血まみれになってみんな逃げていました。慈昭さんの妻はハルピンの大河スングアリーで溺れ死んでしまいます。2 人の娘さんは行方不明。慈昭さんはソビエトにつかまってシベリア抑留です。国家の命令に従って向こうへ行ったら、そういう目に遭う。

山本慈昭さんは「ひどい目に遭った」と思っていました。戦中の日本は、天龍村平岡ダムの工事で中国人をたくさん連行してきて働かせ、その 1 割以上が亡くなっていることを帰国後に知るので。自分もひどい目に遭ったけど、日本国は中国人の庶民にもひどいことをしたんだと知り、供養をして、その人たちの家族を呼んだりして、お世話をした。

そうこうしているうちに、中国名で書かれた手紙が一通飛び込んでくる。近所の人と一緒に「何を書いてあるんだろうな、中国語で書いてあるのは読めないや」といっていると「これ、あんたの娘さんじゃないか」と言われました。当時 6 歳だった娘はもう死んだと思っていたが、実は自分の娘なのですね。日本政府は何にもしませんから、中国になんべんも行って「中国残留孤児」をたくさんこちらに戻す運動をやりました。

シベリアに抑留されたとはいえ「6 歳の娘をほったらかした」と言われてもしょうがない。再会してその顔を見たら、あまりにも皺だらけ、真っ黒な顔、がちがちに強張っているじゃないか。あの子は丸顔だった、というのですが、変わっているのですね。庶民

はそんな目に遭うということなのです。

■イラク戦争

アメリカはイラクに劣化ウラン爆弾を落としましたから、死者を数えると、兵隊の 60 倍の庶民が犠牲になっている。戦争のときには、1 人兵隊が死ぬとその 60 倍の庶民が犠牲になる。これは歴史的にも大体そうです。

そんな具合に、国家と個人というものを考えてみますと、個人の犠牲の方が圧倒的に大きいのです。「日本人は」とか「何人は」とか言っておれないですね。個々人がそれぞれの生活があって家庭があって子どもがあって、愛し合った人がいる状況の中で、「国のため」とか「日本人だから闘え」と言われると、腹が立ってしかたがない。政府の言うことなど聞く必要はないのではないかというのが私の現在の感想であります。

3. 理性 < 感情 —— 自衛と侵略

■「上海の街を守る」——久米元一

戦争で攻められたときには自衛はしょうがないだろうという言い方がよくなされますね。日本少国民文庫で、久米元一という人が書いたものを読みます。上海事変を起こしたときのことで、「上海の街では支那人が軍隊と一緒に日本人に乱暴を仕掛けますので、わが国では陸戦隊を送ってその乱暴者を取り静めようとしたのですが、益々いい気になって暴れ廻ります。我が方も仕方なく、陸軍の兵隊を送って上海の街を守ることになったのです。日本人や外国人にとっても、日本の兵隊が上海の街を取り締まってくれることは、大変ありがたいことなのでした。」侵略しているのに、自衛と言っているのです。

集団的自衛権という言葉が、いかにアホらしいか。政府が「自衛」と言ったら「攻撃」ということだと受け止めた方がよろしいと私は自分の体験でそう思います。

■「アジアのために戦った」——小川未明

小川未明という有名な文学者がいました。彼が以下の文を書いています。「僅か三月ばかりの間に太平洋の制海権も日本軍の手に帰してしまったので、世界中はどんなに驚いたでしょう。今までいじめられていた国々の人たちは有り難がって、喜んでいだろうな。同じアジア人である日本のお蔭です。長い間英米に苦しめられたのを、日本は我慢に我慢をしてきたが、ついに堪忍袋の緒が切れて立ち上がったからです」。アジアのために戦った、アジアの自衛のためにアメリカとイギリスを叩いたという言い方をするのです。

戦後、小川未明は日本児童文学者協会の初代会長になります。そのときに、以下のように書いています。「戦時中は指導者らに何の情熱も信念もなく、ただ概念的に国家のために犠牲になれといい、一億一心にならなければならぬとか言って、形式的に朝晩に奉仕的な仕事を強制してきた。『日本が一番正しい、敵は残忍であり醜悪である』と信ぜしめようとしてきた。終戦後の態度はどうか、正反対のことを平然と語っている」。自分は反省せずにこう言っているのです。

■おとなの豹変

私はおとなの態度の豹変を何度も見てきました。敗戦当時一時的に、瀋陽の街は無警察状態になりました。デパートがガランと開いている。広い所にみんながワーツと行ってモノを盗ってきているから、私も一緒に駆けていきましてね。歯ブラシや洗面器を持って帰ったら、お袋に、「歯ブラシなんかじゃなく、食いものを盗ってこい」なんて怒られた。そしたら、母が勤務していた会社の支社長から「戦争に負けたとはいえ、お前、盗みをやっていいと思うのか」と叱られました。

ところが 2 週間後、だんだん食料がなくなって腹が減ってくるのです。その時に、米屋の襲撃がありました。大勢の人が大八車を持ってワーツと盗りに行きました。その時、私にお説教した支店長が「行こう行こう」と言うんです。お説教した人がとたんに変わって、米の略奪に行きました。こういう非常時には、人間はがらりと変わってしまう。そういうおとなの

姿をたくさん見ました。私は戦争のことを語るとき、そういうおとなになりたくないという気持ちと、自分のありのままの姿を、若い人たちに伝えていきたい。

4. 理性<感情 —— 宣伝・煽動

■教育勅語

四大節と呼ばれた祝祭日がありまして、四方節・元日が 1 月 1 日、紀元節(神武天皇の即位日として定めた祭日)が 2 月 11 日、天長節(天皇誕生日)、明治節(明治天皇の誕生日)が 11 月 3 日ですね。いまだにこれらは、日本の祭日です。戦争の反省をしていたら、こんな祭日は作らないはずです。国は反省してないんですね。

教育勅語というのがあります。教育勅語は明治天皇が出しました。「^{なんしんみん}爾臣民……」、と読みます。これは首相とか文部大臣とか国民に対して「爾」というている。爾というのは部下という意味、お前という意味ですね。

戦時中は、小学校と言わずに国民学校と称していました(1941 年に義務教育を公国民の育成が目的で改名)。各学校に御真影という天皇・皇后の写真と教育勅語が納められた建物(奉安殿・奉安庫)がありました。四大節には校長先生がモーニング姿で登場し、号令をかける教師が「キリーツツ」と叫び、「レイツツ」と言います。児童たちが頭を垂れたままの姿勢でいますと、校長先生が朗々と教育勅語を読み上げる。「朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト……」、これを暗記させられる。暗記しないとポカンと殴られるんです。軍人勅諭も天皇の名前も暗記させられた。神武、綏靖、安寧……、「記憶力いいねえ」なんていわれるけど、記憶の問題ではなくて、殴られるからですよ。そういう儀礼的なことを学校でやらされました。

私は間違っ、日の丸の旗を泥に浸けちゃったことがあったんです。「えーい、佐々木、日の丸を…、先生に言いつけるぞ！」といわれ、先生が来て木刀でバタンと叩かれました。日の丸をけがしたというのでね。そういうような時代でした。神がかっていま

したね。

■歌と戦意高揚 —— 心性操作

紀元 2600 年。こんな昔はね、縄文式時代でしたから、国家らしきものは何もなかったのですけれども、日本では 2600 年の歌を歌ったのです。

♪「^{きんし}金鵝輝く 日本^はの ^{はえ}榮ある光 身にうけて いまこそ祝へ この朝 ^{あした}紀元は二千六百年 ああ一億の胸はなる」(1939 年 日本放送協会制作)。

同級生はみんな知っています。2600 年、天皇がずーっと統治してきたというのだけれども、当時の庶民は割と笑っていましたね。「そんなことはねえだろう」なんて言ってね。

それでね、替え歌があるんですよ。

♪「『金鵝』輝く十五銭 栄えある『光』三十銭 『鵬翼』高く五十銭 機嫌が悪けりや飲まないよ ああ一億の金が減る」

「金鵝」「光」「鵬翼」は当時の煙草の銘柄です。庶民というのはわりとしたたかで戦時中でこんなことを歌ったら捕まっただろうけれど、私は聞いたことがある。それで覚えているんです。

「海ゆかば」これね、ものすごく感激して聞いた。

♪「海行かば ^{みづ}水漬く屍 ^{かばね}山行かば ^{くきむ}草生す屍 ^{おおきみ}大君の辺にこそ死なめ かへりみはせじ」

「加藤隼戦闘隊」という歌もありました。

♪「エンジンの音 轟々と 隼は征く 雲の果て」

長調で、うきうきして。私、軍国少年でしたからね。その後にはぱっと短調になって悲しい。

♪「^{かんか}干戈交ゆる 幾星霜 ^{ななたび}七度重なる 感状の ^{ものふ}いさおの蔭に涙あり ああ今は亡き武士の 笑って散った その心」

そういうような歌を歌って、戦意高揚するわけですよ。戦争というのは国の指導者だけがやろうと思ってもできないのです。国民が打って一丸となってやらないとできない。それを組織化するには「やれーっ」と命令するだけではダメで、心の底からやるようにさせる「心性操作」が必要であった。だから、そういう操作に、我々は乗らないことが必要なのです。

けれども、たとえば集団的自衛権の話をするとき「自衛はしなくちゃ、攻められたら困るじゃないか」と思う人々がいます。ですけれども、どこで見分ける

かという、戦争する場所を見分けるといい。外国が戦場でしたら、いくら「自衛」といっても侵略です。中国で戦争していたら日本が自衛と書いてあっても侵略でしたし、中国人が自衛するでしょう。だから中国人が抵抗するのは当たり前なのです。

集団的自衛権というのは、日本の独自の自衛とは違うんですね。外国で自衛しようというのです。外国で自衛するというのは国家の指導者たちで利権を争ってやっているのですから、そんなのを一緒にやる必要はない。だから自衛隊がもし出ていくようなことがあったら、犬死にしかならないではないか。

■神国

これは小学校 1 年生 2 年生向けに書かれています。「ニッポンハ カミノクニ、オクニハ カミノ クニ オンコヲ テンワウヘイカニ イタダイテ テンチト トモニ サカエテ イク オクニ、バンザイ バンザイ オクニハ ニッポン オクニノ トウサマ テンワウヘイカ、オクニノ カアサマ クワウゴウヘイカニチュウギニオツカヘ イタシマセウ、一シャウケンメイ、ウレシイ ウレシイ オクニハ ニッポン」

お国の父さま天皇陛下、お国の母様皇后陛下。わたしが小学校 2 年生の時に、これを担任の教師が教えて、「佐々木、天皇陛下はどなた様にあたるか」「はい、私たちの父親です」と言ったら「そうだ」と言って、もう一人、勉強のできない子がいまして、「〇〇、皇后陛下は？」と言ったら、「うーん、えーっと、女です」と言ったら、先生もぷっと笑った後で、バチーンとひっぱたいた。そんなような、くだらん記憶がたくさんあります。

5. 加害と被害 —— 庶民戦争体験

■対馬丸

「対馬丸」というのをご存知でしょうか。毎年 8 月には対馬丸の追悼記念式典を沖縄でやりますが、日本の内地の新聞はほとんど報道しない。でも、『琉球新報』はちゃんと報道していました。

1944 年 8 月 22 日、沖縄の疎開船「対馬丸」がア

メリカの潜水艦の魚雷で沈没させられました。対馬丸に乗っていたのは学童 834 人、疎開者 827 人、全部で 1600 人以上。その頃はアメリカ軍が制海権を握っていますから、魚雷で沈没させられてしまう。船員は 8 割か 8 割が助かっていますが、子どもと一般疎開者の人は 7 割から 8 割死んでしまっているのです。

今年の『琉球新報』で特集をして、生き残りの人たちの手記を掲載しています。糸数裕子さんは 89 歳、私より 7 歳年上の方ですが、当時 18 歳か 19 歳の、疎開の引率者だったのです。彼女は戦後、33 回忌後まで沖縄の那覇の街を怖くて歩けなかったというのです。生存罪悪感、サバイバース・ギルトです。「なぜあんただけ生き残った？ うちの子は死んだのに」と周りから言われそうな気がするのです。実際にそう言われた人もいます。戦争責任はもっと地位の高い「偉い人」にある。だけど、庶民はそういう目に合うということを、ちゃんと知っておいた方がいい。戦争には協力しないほうがよろしい。

相手が圧倒的に強いから協力せざるを得なくても、頭を下げて不服従という態度があります。お金も力も何もない庶民は、延々と不服従の精神で生き抜いているということを知らなくちゃいけないと思うのです。

海に投げ出されて生き残った人の中に、当時、国民学校 4 年生だった平良啓子さんがいます。漂流していると、いかだに乗って逃げてきた人たちがいた。そのいかだに這い上ろうとしたら、「後から入ったな」と、こぶしで私の背中を打ったと言います。弱い者同士が喧嘩するんですね。何日も漂流していて、ある日いかだの上にトビウオがぽんと飛び込んできた。それを食べようと思ったら、横のおばさんが食べてしまった。もう悲しくて悔しくて、というような話をしています。

ただ、ずっとかばい続けてくれた優しいおばさんもいたと、平良さんはいいます。その人は自分が助かる直前に海の中にずるずると引き込まれて亡くなったそうです。こんな話がどっさりあります。

■私刑と軍隊

古山高麗雄の小説をみますと、いっぱい戦争の

場面が出てきます。

例えば「戦友」という歌。♪「ここはお国の何百里……」。歌ではいかにも同志という感じがしますけれども、どうも古山高麗雄の小説を見ますと、内務班（軍隊の管内居住者のうち軍曹以下の下士官及び兵を以て組織された居住単位）の戦友というのは上下関係がありました。「戦友をあてがう」といわれ、新兵は何をするかという、「戦友」である古参兵の靴を磨く、洗濯する。そういう役割だったというのです。

自衛隊のなかでもいじめがありますね。陸上自衛隊もありますし、航空自衛隊でも、海上自衛隊でもありました。調べてみますと軍隊の中でのいじめというのはアメリカでもイギリスでもドイツでもフランスでも、どこでもありますね。閉鎖空間でやるといじめがばれないからです。

日本の軍隊のいじめ、私刑については「セミ」なんていうのがある。柱にしがみついでミンミンミンミンとずっと鳴き続けなくてはならない。「声が小さい」とか言われてやらされる。それから「自転車」。机を二つならべて、そこに手を置いて足は宙に浮かせて、ペダルを漕ぐように足を動かさなくてはいけない。「速度が遅い、速めろ」とか言われるね。

それから「驚わたり」というのがあって、寝台の下をずっと駆けてって、ふっと顔を出さなくちゃいけない。「女郎屋」というのがあって、銃を立てかける銃架が女郎屋の格子に似ているのですね。そこに入って、「ちょっとお兄さん寄ってらっしゃい」と言わなくちゃいけない。「シナを作れ」とかなんか言って責められる。それから「雑巾舐め」「靴舐め」というのがある。上官の靴をなめさせられる。人としての尊厳を傷つけることを目的にしています。

「ビンタ」というのはもう日常茶飯事でした。普通は上官が殴るんだけど、たくさんいると殴るのが面倒臭い。「一斉対抗ビンタ！」という向き合って、お互いを殴るんです。同僚だから軽くやろうぜということでチョンチョンチョンチョンといい加減にやっていると、「馬鹿野郎！」とって後ろから飛んできて「こうやってやるんだ」と思いきり強烈に、倒れるまで殴ります。それを互いに 30 分もやらせる。軍隊の中にはそういう私刑があったりします。今だったらそ

んなのはないから、と思いきや、今でもあるんですよ。ですから戦争するときに庶民はどんな目に遭うか、兵隊に行ったらどんな目に遭うかというのを、やっぱり若い人に知っておいてほしい。

■戦犯

古山高麗雄の小説の中にビルマのカレン族の襲撃というのが出てくる。カレン族というのはキリスト教なんですね。そこを攻略するという上官の命令で、一人の男を引っ張り出してくるんですね。「こいつはスパイかどうかは不明だが、みせしめだ」と言ってやらされるんです。それから 10 歳ぐらいの少女が逃げている時に「あれを撃て！」と上官が言う。撃ったことのない古山一等兵はもじもじしています。「射撃訓練だ、やってみろ」と言って、バンバンバンと撃つと全部外れるんですね。下手な射撃だったものだから。その少女が助かって、自分ほっとしたというようなことが書かれています。

軍隊の中にはいろいろな仕事がありまして、衛兵所というところでは、立哨といって立って警戒、監視する。動哨というのは動きながらずっと警戒する。そこに上官がやってきますね。「キチャー！」。これ日本語ですよ。敬礼のことを「キチャー！」。何を言っているかということは問題ではない。大きな声で元気に言えというんです。「ベンジョバッチャマイリマー」って言うんです。何を言っているかという、「便所へ行ってまいります」。声が小さいやり直すと 10 回ぐらい言わされる。

慰安所というのがありました。将校は 6 円かかります。下士官は 4 円、兵隊は 3 円だということです。兵隊の給与は月に 23 円です。No.1 桃子というのが 1 回で 10 円だということです。そういう具合に全部階級でお金の額も違うということです。

敗戦になり、ベトナムで古山は戦犯で刑務所に入ります。最前線でひどいことをやったり、虐殺したりというのは C 級戦犯で、一兵卒でも処刑されたりする。一緒に雑居房に入っている人があと 10 日で処刑される。まだ十日生きられる、殺されるまでは朗らかにやろうぜと言ったというような話があります。

戦争に行つて、後で戦犯になつたりして、そのことまで想定しないと戦争に協力できませんね。

■アメリカ海兵隊

アメリカの軍隊はそうでもないだろう。日本が軍国主義だったからだろうというけれども、アメリカには海兵隊というのがあります。沖縄に海兵隊の基地がありまして、普天間と日本の佐世保にその海兵隊の訓練所があります。そこを撮影した『ONE SHOT ONE KILL 兵士になるということ』という映画があります。この映画を見ていると、この中で日本の軍隊とそっくりな訓練をしています。

何のために戦争するか、敵にも家族がいてなどということは一切話しちゃいけない。ご飯は片手で食べる、臍垂は何十回とって、それができないとやり直し、やり直し、二週間ぶっ続けで訓練させられる。そして人の殺し方を 30 通り教わる。それも鉄砲を使わずに手で殺す方法を教わるというのです。国の指導者は兵士を感情を持たない殺人機械のように育てます。

沖縄で強姦事件がありまして、抵抗したということで主婦が殺されたことがありました。日本で裁判が出来なくて、容疑者はアメリカに行ってしまうのですが、誰が殺したかどうかわからない。でも素手で殺せるのは、アメリカ海兵隊員だけだろうという予測が成り立つ。この映画を作ったのは 2009 年ですけども、海兵隊員は現在 140 万人います。そういう具合に軍隊というところは今も営々と生きているから、戦争をしたら、そして一兵卒になって入ったら、どんなことになるかということが想像できるはずですよ。

6. 全体主義を止める

■三たびの海峡

帯木蓬生の『三たびの海峡』という小説を紹介しておきます。朝鮮、釜山の出身で河時根（ハーシゲン）という人がいまして、これは実在の方ですけども、スーパーマーケットを三つ経営していて戦後幅広く企業家として成功した人です。帯木蓬生が聞き取りをしながら小説風にしたものです。

河時根はお父さんが病気がちなのに、日本に徴用されて日本で働けというので、強制連行されそう

になるんですが、12歳の少年だった自分が1943年に徴用代行で日本に来るんです。敗戦当時の私と同じぐらいの年です。日本に来て炭鉱で働かされた。その他に造船所やダム工事などで働かされました。朝鮮人に対してだけ私刑というのがあって、何人も中で死んでいるんですね。この河時根さんは逃亡に成功します。朝鮮の釜山ですから、民間の船で逃げるんですね。そしてもう日本は絶対に行きたくないと思うのです。

戦後のある時、炭鉱の町から手紙がきまして、ボタ山を壊して新しい施設をつくるのに、韓国人の人たち朝鮮の人たちに手伝ってほしい。資金も出来たら出してほしい。そういう要請が来る。戦争の思い出したくない恨みがある。その恨みを朝鮮の同胞たちにもあんまり言わないし、日本人にも言いたくない。半世紀にわたって、50年以上にわたって沈黙していて、静かな恨みがあるけれども、朝鮮や韓国で反日運動がおこると、なんかいやな感じがするというんです。ああいう感情が私の中にあるかぎり、日本人に対していい印象を持っていないから、また同じように反抗したり、相手を殺したり殺してやりたいなんて思うからと、反日小説よりも親日小説を読むほうが楽しいというようなことを感じている。でももう一度、文化交流のために来ようかな、それを日本人にも分かってほしいということで、海峡を越えてくるといふ小説になっております。小説であって個人の行動ですけども、国際社会は紛争が多くなり、喧嘩ばかりしていたりするのに比べて、庶民の国際交流の方が大切になっている時代だと思います。

■ベトナム帰還兵 アレン・ネルソン

もうひとつ紹介しておきたいのは、ベトナム帰還兵のアレン・ネルソンさんのことです。彼は黒人の方ですけども、ベトナムでたくさんの人を殺しているのです。ベトナム戦争が終わり、帰国してアメリカに帰るけれども、たくさんの人を殺したという記憶があり、PTSD だと診断されます。病院に通っても、なかなか戦争障害が治らない。アメリカではホームレスの人たちがたくさんいるのですが、ホームレスの 8割ぐらいが戦争帰還兵だということです。つまり気が荒くて人を殺すことをなんとも思わなくなった人たち

は PTSD にかからないけど、俺は殺した、殺したと、特に幼い子どもを殺したというとき、結婚して自分の子どもが出来たりするとすごく苦しくなって、それが再発するようです。

彼はあちこちで精神科の病院に通っていたりするんですけども、ある時小学校の先生と知り合いになって、「苦しいだろうけど、うちの小学生に話をしてくれないか」と頼まれるのですね。アレンさんは小学校に行き話し始めるんです。

戦争はこういうものだとかペラペラしゃべっていたのが、最前列の小学校4年生ぐらいの少女に「あなたは人を殺しましたか」と質問されて、はっと止まって答えができなかった。最初に殺した40代の男の姿が浮かんできた。苦しうに血だらけになって。銃も何も持っていない民間人を殺したんですね。

アレンさんはしばらくその少女の前で黙っていたんですけども、小さな声で「イエス」と答えた。そして、少女は彼のところまで来て、「かわいそうなネルソンさん」といって彼を抱きしめた。「あなたは人殺しか」と怒られるかと思ったら、その少女が臍のあたりで、涙を流して見上げたというんです。おなかのあたりで目にいっぱい涙をためた少女の顔があった。その一言を聞いた途端、彼は息ができなくなった。震えながら息をすると、大粒の涙が自分のなかから出てくるんですね。そして子どもたち全部がわーっと駆けよって来て、彼を抱きしめた。その中で彼は何か解けた。戦争をしているときに涙を忘れていた、私は泣くことを忘れていた、戦争に涙を奪われたというのです。自分の境遇を恨み、自分が兵隊に行った選択を恨み、自分自身が世の中にも愛想尽きて自殺しようとも思った。しかし少女の涙が彼を溶かし、彼に立ち直す決心をさせた。

アレン・ネルソンさんは反戦運動をずっとしていて、沖縄での辺野古の基地の建設反対運動に参加しました。小さな小舟に乗って反対という旗を掲げるのです。すると海上保安庁の大きな船が来てその小舟のまわりで大きく旋回すると、大波が起り、小舟をひっくり返そうとするのです。それを何回も繰り返しているときにネルソンさんがものすごく怒って、「あいつらを殺したい」といったんです。その時に一緒に反戦運動をしていた人が「あなたは

人を殺してきて、それを反省して無抵抗、暴力を否定していたのではないですか。海上保安庁の人だって仕事でやっているのですよ。」と言ったら、ネルソンさんが30分間、苦しうな顔をして黙っていた。答えが出てこないのです。その時に、質問した人が「ネルソンさん、あなたの苦悩、苦しんでいることを信用しますよ、あなたを信用しますよ」と言われて、ネルソンさんの顔がパーッと明るくなったというんです。

■ヒューマニズムと庶民の交流

つまり民衆には戦争後遺症というのがあり、人を殺したりしたときに立ち直るのが大変なんですけれども、仲間同士の愛情とかヒューマニズムですね、人を信ずるといふことがあると、互いに立ち直り、他国の人も親しくなれるということがあります。

「戦争屋どもをやっつけろ」なんていうと解決するかというと、私はそんな感じがしないんです。国家というのは利権がらみで、喧嘩をする材料がどっさりあり、なかなか戦争を止めないし、原発事故があっても、ウランとプルトニウムを持っていると核抑止力になるなどと戯言を言って、再稼働しようとしてます。自然を破壊する開発競争も止めません。だけど、庶民同士が動かなければ、戦争は次第になくなっていくのではないかと感じがいたします。

バングラディッシュの人が私の近くに住んでいて、ずっと10数年交流してしょっちゅう会ったりしていますけれども、そういうことが我々にはできる。するとバングラディッシュと戦争しようなんて思わない。私はイギリスにしょっちゅう行っていたんですが、イギリス人の友達が三人いまして、イギリスと戦争もしたくない。やっぱり友達がいて戦争はしたくないという感じがあります。

そういうような交流を、あらゆる階級の人と付き合いというような態度をとっていると、戦争が遠のいていくのではないかと。政治家が勝手に戦争をやるなんていって政治家のせいにならないで、我々の生活の見直しということが、平和につながっていくのではないかなという感じがいたします。

戦中、いわゆる朝鮮人や中国人に対して差別的なこと、「チャンコロ」と言ったりということがありました

が、同級生を見ていると、人によってかなり違う。積極的にいじめる人も、そうでない人もいた。ひとりひとりの人間がかなり違う。戦争に参加しつつも、積極的に本心でやっていた人というのは実は少数だったんじゃないかというのが私の記憶です。ですから、態勢や新聞で宣伝しても、それに流されないような個人というもの、そして個人の付き合いというものを周りでつくっていくことが大切だと思います。

7. おわりに

まとめとして三つのことがあります。ひとつは、史実と現実を認識することです。たとえ庶民であっても、「ユダヤ人虐殺なんて知らなかった」と言うてはいけない。無知の罪というのがありまして、庶民の戦争責任も問われますから「知らなかった」という言い訳は許されません。「イスラム国って何だろう」とか、積極的に知らなければいけないと思います。

二つ目に、国家とか政治というのはあんまり信用しないで、文化人類学とか社会学で、人間や社会の生き方そのものを知ることを努めた方がいい。

三つ目は、ヒューマニズムです。例えば、「コバネの実験」です。トルコとシリアの国境付近にロージャバという地域の中にコバネがあります。ここでクルド人の自治組織を創りました。クルドの人々は国家を創れなくて苦難の道を歩んできたのですが、今世紀に入って、どの国だか分からない地域に、住民自治の解放区を作った。BBC 放送の記者がネットで伝えています。

トルコ国籍のオジャランというクルド人の指導者が、アメリカの社会運動家ブックチンが提唱した「社会変革のエコロジー論」を実現させたのです。今の世界では、巨大都市への人口集中の結果、環境が破壊され、消費社会で金銭感覚が麻痺し、他者への無関心がはびこり、資本主義が自滅へと向かう。だから、都市を分散し、小地域の住民自治区を創り、自足自給と地産地消を目指し、再生可能エネルギーを使い、市場原理を廃し、ヒューマニズムと非暴

力と不服従の精神を基に、異言語・異人種・異宗教を容認し、男女平等の無階級社会を創ろうというものです。

最近 10 数年間でテロ報道が急増しました。2001 年のアメリカの同時多発テロ、サウジアラビアのリアド、スペインのマドリード、イギリスのロンドン、フランスのパリ、今年に入って日本人人質が殺されるなど、テロの話で持ちきりです。

どうすればいいのか。コバネの実験に学ぶ態度が必要です。残念ながらコバネは「イスラム国の支配下にある」と称して、アメリカを中心とする有志連合の 3000 回の空爆で瓦礫の山となりました。でも、世界の庶民はコバネの実験で、直接民主主義の実現が可能であることを知りました。私たちは歴史の転換点にいることを自覚し、人間性と不服従と非暴力、それに苦悩を共有しながら寛容さを生み、それが戦争という憎悪の連鎖を断ち切ることにつながるのだと思います。

要するに、他者の立場で考える態度を身につけることです。身近なところでは、連行されて亡くなった中国人を弔った山元慈昭さんの実践があり、『三たびの海峡』の主人公であり、韓国人の河時根(ハーシグン)さんの日韓交流があり、アメリカ人であるアレン・ネルソンさんの反戦運動を紹介しました。

国の指導者に任せていると、戦争への道を進むことになりかねません。過去の庶民の実践例に学びながら、今に生きる私たち庶民の力で憎悪と暴力の連鎖を断ち切ることだと思います。

(文責:編集委員会)